

総合

平成三十年代

一般入学試験問題

国語

享栄高等学校

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(解答はすべて解答用紙に記入しなさい。)

人間はこの世に生きている限り、何らかの仕事をしなくてはならない。もつとも、ホームレスで「何もしない」で生きている人もいる、と言う人もあろうが、ホームレスの人も結構「仕事」をしている。寒くなつたときは、凍死しないような場所を確保<sup>a</sup>しなくてはならない。毎日食べていくためには、物乞<sup>ものこ</sup>いが必要かもしれない。ともかく、まづたくの「無為」では人間は生きていけない。

これは極端にしても、人間は生きていくためには仕事をしなくてはならない。太古の頃は、ともかく食糧の獲得と、気候の悪いところでは、それに耐えていくための方策、住居とか衣服の確保が必要だつたろう。そして、実際はどのような過程を経たか、詳細は不明にしても、ともかく人間は集団で生活するようになった。そして、集団で生きていくための方策として、分業が成立した。つまり、一人の人間が自分が生きていくためのすべて<sup>b</sup>のことを受けもつのではなく、各人が自分の受けもつべき仕事を分担し、全体として人間が効率よく生きていくようにし、そこに人類の文明ができあがり、発展してきた。

かくて、現在の日本においては実<sup>①</sup>に多くの職業が存在することになった。仕事というよりも職業というところ、それは社会のなかで有用として認知されていることが明らかである。そして、「職業に貴賤<sup>\*いきだん</sup>なし」ということが、現在の社会の標語となつている。職業の種類によつて、人間の価値判断を行なつてはならないと考える。

I、明治維新前の日本においては、職業と身分とは相当に明確に関連していた。士農工商という言葉があるように、これらはもともとは職業を示すための言葉であるのに、それは「身分」として固定されたものと考えられた。そして、それらは上から順番に身分の差を示していた。人間は生まれながらに、身分が決まつており、そして職業もそれに従つて決まつていた。

今日の考えによると、これは極めて不合理である。現在の日本においては、すべての国民に職業選択の自由があり、職業の種類によつて人間の価値判断を行なわない。昔は何と馬鹿なことをしていたのかと思うが、制度というものは、それなりの利点をもっているもので、単純<sup>A</sup>に非難するばかりのことでもない。現在の仕事について考えるために、少し昔にかえつて、その当時の仕事観について考えてみよう。

現在の観点から、昔の人は「不自由」で気の毒だつたとのみ思うのは間違つている。昔の人々はそれぞれが自分の職業に誇りをもっていた。それは、その職業が深いルーツをもつていたからである。そのひとつはすぐにわかることだが、世襲<sup>せじゆ</sup>ということである。自分が従事している職業は、父親が、祖父が、そうして曾祖父<sup>そうそふ</sup>がやっていた。つまり、長い時系列のなかに自分の行為がしっかりと位置づけられている。それに、あまり「進歩」ということがなく、むしろ「伝統」が重んじられるとなると、上から下と伝えられることがそのまま意義があるので、しっかりとした線上に自分が位置していることがわかりやすい。

次にもうひとつ大切なことがある。それは、農業であれば、「土」という人間存在を超える大きいものが、その職業の背後にある。このことは実に比較にならない重みとその仕事に与える。士農工商の最高位にある「士」は、そのようなものとして「死」をもつていた。常に死と対峙<sup>たいじ</sup>して生きる。そこに武士としての誇りがあつた。「工」の場合は、それによつてつくり出す「もの」がそれであつた。刀鍛冶<sup>かたながじ</sup>のつくる刀などは、その最たるものだが、「もの」はすなわち「いのち」であり「たましい」であつた。しかし、「死」、「土」、「もの」と並べてみると、そこに自ら段階が感じられるようなところもある。そして、このような考えに立つと、「商」の背後に見えるものが定かでない、

ということもあって、それは下級と見なされた、と思われる。

以上のような考えを具体的に示すものとして、それぞれの職業が自分たちの職業神をもっていた事実があげられる。農業は四季おりおりの神事と結びついていたし、Ⅱ、大工、屋根葺、左官などの建築関係者は聖徳太子を祭り、太子講を年中行事としていた。鉾山関係者は金屋子神や山神を祭った。各職業が何とかして自分のルーツを深くもつのに努力しているのが認められる。商業も、いろいろな座が神社や寺に関係しているのは、その権益の保護ということもあるが、やはりルーツの確立ということがあったと思われる。

職業に従事しているという事実が、自分という存在を根づかせることに大いに役立っていたので、身分によって固定され不自由であるとは言っても、毎日を安定感をもつて生きていくことができた。それぞれの人が自分の仕事に誇りをもつことができたのである。

近代になって、日本は欧米の影響のもとに近代国家として生きてゆこうとした。特に敗戦を契機としてアメリカの影響を強く受けるようになったので、前節に述べたような職業観は急激に変化してしまった。

ともかく、自由で平等ということが日本人にとって非常に魅力あることになった。職業選択の自由が誰に対しても保証される。このようになると、親の職業を継ぐのは「古い」と感じられる。多くの子どもが親の職業を世襲することを拒否するようになった。誰でも好きな職業を選ぶことができる。こうなると職業に貴賤はないと言いつつも、そこに一般的な価値づけのようなものができてきた。まず、できる限り「大学」を卒業しようとする傾向が強くなり、大学卒の人が職業を選ぶときの「人氣」が形成される。

このときに、前述したようなルーツからは、まったく切れて職業選択をする者が多い。その場合、これまで実に多様な職業がそれぞれのルーツをもつて存在したのであるが、現在においては、経済的価値という、すべてのものを一様にする力がはたしているのが特徴的である。つまり、その職業の内容がどんなことなのか、どんな歴史をもつかなどということは無関係に、それによって得る収入という尺度によって、一様に序列がつかってしまう。もともと、その職業によっては疲労度が特に高いとか、いわゆる「汚い」という感じがあるとかによって、価値が減じる場合があるが、何と言っても経済的価値の強さは認めざるを得ない。端的に言って、よく儲かる仕事はよい仕事なのである。

このような傾向が強くなり、敗戦後は急激に日本人が平和好きになったこともあって、興味深いことに、現代の日本では、士農工商の順序が日本人の心のなかで逆転したようなところがある。一番お金をよく儲けるビジネスマンがトップで、それについて工業、そして農業となる。存在の根っこという感じではなく、「お金」というものが職業の価値づけとして力をもつてきたことは事実である。

お金さえあれば何でもできるし、何でも手に入ると言う。しかし、人間はフシギなもので、お金さえあれば「安心立命」とはいかない。「安心」するためには、人間は何らかのルーツとつながっていないと駄目である。あるいは、アイデンティティと言ってもいいかもしれない。

日本人はこれまでの職種ごとのルーツと切り離された結果、職場という「場」をアイデンティティの支えとするようになった。これはこれまでも多くの人によって指摘

されてきたように、自分は「電気技師」であるというよりは、「××会社」に勤めています、ということによって自分の存在を明らかにする、日本人の特徴となって現われている。③自分がどこに所属するかということによって、自分のルーツとするのである。

日本以外の東アジアの国々においては、血縁を基にする「家族」が、各人のアイデンティティのよりどころになっている。個人主義をベースにする欧米の近代文明を取り入れるときに、それがひとつの妨害要因としてはたらいっているようである。これに比して日本は、血縁をそれほど重要視しないので、近代化をするときに、比較的早く行なうことができた。

日本人はこのような考えによっているので、会社が一種の擬似家族的役割を果たすようになってくる。日本人は「仕事好き」とか「はたらきすぎ」と言われる。そのような面も確かにあり、それについても考える必要があるが、就労時間が長いことの要因のひとつとして、会社内の家族的一体感の保持ということが大いに関係していることも認めねばならない。ともかく、なるべく「一緒にいることが大切になってくるので、「つきあい」のために残業することも生じてくる。そして、たとえば二週間も三週間も休暇をとると、その間に自分の位置がどんなふうに変化しているか心配になってきたりする。

職場が擬似家族的な意味をもちはじめると、就職に当っては、どのような仕事の内容なのかということよりも、「寄らば大樹の蔭」で、安心できる大企業を優先しようとする気運が生まれてくる。自分の存在をあずける「場」を求めめるのである。

ところが、このような状況も最近では変化してきた。リストラの波が押し寄せてくると、擬似家族はしよせん擬似でしかないので、容赦なくカイコがある。これよりも、もっと深刻なことは、定年退職である。退職してしまうと、会社内の人間関係が自分が感じとっていたのよりも、はるかに稀薄であることを思い知らされる。部長として在任していたときは、多くの人が自分を大切にしてくれていると思っていた。しかし退職してみると、それは自分という「人間」に対してよりは、部長という「地位」に対してのものであったことがわかってくる。それに、もっぱら擬似家族の方にエネルギーを投入してきたので、今さら本家族の方に戻るにしても、うまく戻れない。もともと深刻な場合は、退職と共にいわゆる退職金離婚を申し渡されて、どこからも所属を拒否されるという場合もある。

昔は、働きづめに働き、だんだんと枯れてきて、退職してしばらくするとお迎えが来て、皆に惜しまれて去る、というようなパターンができていたが、近代医学の進歩④というのが、このような日本的な美的完成を阻むようになった。

人間が生きる生涯を、子どもと大人という二つの時期に二分する。大人であることと条件は、職業をもって自ら収入を得、家族を養っている、という考えが、昔の考えであった。そして、この考えは男性中心であり、女性は、大人の男と結婚し、子どもを生んで育てることが大人であることと条件であった。

人間の文化や社会が変化（あるいは進歩）するに従って、このような単純な二分法は通用しなくなると、子どもと大人との間に「青年期」という中間帯ができた。青年は、自ら収入を得ようとする可成りかもしれないが、より有効で適切な職業を選択するための準備をしている期間ということになる。この期間がだんだんと延長される傾向があり、青年期の「モラトリアム」などということが言われるようになった。

これに続いて生じた大切なことは、女性の社会進出である。男女同権の考えに基づいて、女性も男性同様に職業をもち、社会に出てくる。職業をもつ人と家事を受

けもつ人との二分法が通用しなくなった。このことは、男女が共に家庭を築いていく上で、その「仕事」は、職業上のこのみを考えていては成立しなくなったことを意味している。夫婦がどのように「仕事」をするのかを二人で考えねばならない。

これに加えて既に少し触れた高齢化社会の問題が生じてきた。定年退職まで二所懸命に働いたとしても、それ以後八十歳まで生きるとすると、二十年の年月をどうして暮らすのか、その間にどのような「仕事」をするのか、という問題が生じてきた。これはなかなか難しいことである。それまでの延長上に仕事を続けられる人があるが、それはむしろ稀である。残りの人生を意義あるものとし、周囲の人々ともうまく関係を維持していくとなると、これは老年になってから、まったく新しい課題と取り組まねばならぬことになる。

このような状態になってくると、人生における「仕事」という概念を、これまでのどうしても職業に結びつけて考える考え方から離れ、拡大して考える必要があると思われる。

遊びは仕事に対するものとして、何といつても生きていくためには稼ぐことが大切と考えられているときは、低い評価を与えられていた。しかし、これまで述べてきたように「仕事」を広義にとつて考えると、それは「遊び」も含むことになり、それらを全体として見る広い視野で考えることが必要となってくるであろう。経済的に豊かになつてくると、金を稼ぐということのみを第一義に考える考え方では、人生設計がうまくいかない。このようなことを反映して、昔ならば「遊び人」として軽蔑されたような人が、今はむしろ高く評価されたり、高収入を得たりしている。たとえば、スポーツ選手、芸能人などがそうであるし、芸術家、学者などもある程度はそう言えるだろう。

今流行の「ボランティア」というのも、「仕事」であることには違いないが、職業ではない。それでは、それは「遊び」だと言うと、おそらくボランティアの人は怒るだろう。「われわれは真剣にやっているのだ。遊びなどではない」と言うだろう。確かにそのとおりである。去る阪神・淡路大震災のときも、多くのボランティアが活躍して感謝された。「近頃の若い者」の悪口を言う人は多いが、実のところ、多くの若者がボランティアとして来てくれたのは嬉しいことであつた。

しかし、何事であれ、よいことばかりはない。たとえば「心のケア」のためには、震災の恐怖体験を他の人に表現するとよい、などということを生嚙り<sup>か</sup>で知ると、避難所を訪ねていつて、「震災の体験を話して下さい」とか、相手が子どもだと「震災のときのことを絵に描いてみなさい」とか言つて、被災者に嫌がられたりする。そのような話をするにしろ、どのような人間関係のなかでどのように話すが非常に大切で、表現を強要したりするのは有害なだけである。ところが、ボランティアの人は熱心に大マジメにやっている。

このようなことは、老人ホームなどでもよく生じている。一日だけ訪問してきたボランティアがやたらに親切に世話を焼きすぎると、老人の依存性が強くなつて、翌日から施設の職員が困つてしまう。

このようなボランティアは、ともかく熱心に働いて利益を多くあげるほどよい、と考える「仕事」感覚をそのままボランティアにもちこみ、利益の代わりに、自分の「善意」ということを入れて、それによって自分は随分と「よいこと」をしたと思つている。既に述べたように、現在では職業においても「利益」のみを優先に考えていたのでは、ほんとうに生きることにつながつてこない。ボランティアの場合も「善意」優先では困つてしまう。よほど広い視野をもち、他人の心を察することができないと、単

純な「仕事」感覚でボランティアをしては、近所迷惑を引き起こすだけになる。

ボランティアをするにしても「善意の押し売り」にならないためには、そこに「遊び心」を入れてはどうであろう。そんな不真面目なとすぐに怒られそうだが、ここに言う「遊び心」というのは、いいかげんな気持や態度というのではなく、心に余裕をもたせること、自分の行為を少し離れたところから、すぐに役立つとか社会のためとかというのに捉われずに眺めてみることを言っている。遊びというのは他人のためにするのはなく、自分が楽しい、面白いからするものだ。ボランティアもそれに近いのではないだろうか。他人のためではなく、それをする自分が自分にとって意味があるからする。つまり、やらせてもらっているのである。仕事ではなく遊びでやっていると思うと、少なくとも威張りたい気持はなくなるだろう。「遊び心」としての余裕をもって見ている方が、自分のしていることのほんとうの意味がよく見えてくる。

『日本文化のゆくえ』 河合隼雄著

(本文中に省略をした箇所があります。)

(注) ※1 貴賤……………とうといことと、いやしいこと。

※2 寄らば大樹の陰…頼る相手を選ぶならば、力のある者がよい。

※3 モラトリアム……………知的・肉体的には成人していながら、社会人としての義務や責任を課せられないでいる先延ばしの期間。

問一 二重傍線部 a「確保」、b「フシギ」、c「カイコ」について、カタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 空欄 I、II に入る適切な語を次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし    イ たとえば    ウ また    エ つまり    オ もしも

問三 波線部 A「単純」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問四

傍線部①「実に多くの職業が存在することになった」とあるが、この職業というのはどのような経過で成り立ってきたか、最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 大昔、人は生きるために個人的な仕事をしていたが、人が集団生活をするようになり、社会に必要な仕事をそれぞれが分担し専門の職業が生まれてきた。

イ 昔から職業には様々な種類が存在していたが、現代に至るまでに楽な仕事を優先的に選択した結果が現在の合理的で簡潔な職業の形態になった。

ウ 大昔から人は生きていくために一人で多くの職業をこなしていたが、集団で生きることになったためそれぞれを分担することになり、多くの仕事が生まれた。

エ 昔から仕事の分業が成立しており、その職種は現代と同様に多かったが、仕事の利便性や担い手の変化などによって、さらに多種多様な現代の形に落ち着いた。

問五

傍線部②「それぞれの人が自分の仕事に誇りを持つことができたのである」とあるが、その理由として適切なものを次のア～オの中から二つ選び、それぞれ解答欄に一つずつ記号を記入し答えなさい。

ア 自分の職業が世襲によって受け継がれてきたという時系列の中で、自分の行為がしっかり位置づけられるから。

イ 各職業の職業神が背後に存在することによって、職業自体が神格化されているから。

ウ 伝統を重視する当時の法令が身分の差に関係なくそれぞれの職業に価値を持たせているから。

エ 職業神によって価値が与えられている職業に従事することを価値あることとして見出しているから。

オ 各職業の背後に人間存在を超越した大きな存在があり、それが職業に重みを持たせているから。

問六

傍線部③「自分がどこに所属するかということによって、自分のルーツとするのである」とあるが、それはどのようなことか、その説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の職場を自ら作っていくことで、自分に誇りを持つようになるということ。

イ 自分の職業ではなく自分の職場が自己の存在を明確にするものになるということ。

ウ 自分の先祖の職業ではなくその職業神に敬意を払うようになるということ。

エ 自分の存在証明を職場ではなく職業に求めるようになるということ。

問七 傍線部④「近代医学の進歩というのが、このような日本的な美的完成を阻むようになった」とあるが、それはどのようなことか、その説明として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 近代医学の進歩により、日本人の平均寿命が延びて仕事を辞める機会を逃し、いつまでも仕事に打ち込むことになったということ。
- イ 近代医学の進歩によって、平均寿命が延びたため、退職後に家庭でどのような日常を過ごしたら良いかわからない人が増えたということ。
- ウ 近代医学の進歩により、平均寿命が延びた結果、仕事を全うし周囲の人々に惜しまれつつ臨終を迎えるということができなくなったということ。
- エ 近代医学の進歩によって、日本人の平均寿命が延びたため、定年とされる年齢が高くなり、現代の大きな問題となっているということ。

問八 傍線部⑤「そこに『遊び心』を入れてはどうであろう」とあるが、「遊び心を入れる」とはどのようなことか、最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「善意」優先と堅く考えるのではなく、自分が楽しく面白いから、という余裕を持って行動すること。
- イ 「好きだからやっている」というように、自分の好みを優先して仕事を選び、徹底して行動すること。
- ウ 心の根底に「善意」が存在していることから「人の役に立ちたい」という気持ちを持って行動すること。
- エ 「心のケア」をしていくために、相手にも「楽しんでもらう」という気持ちを持って行動すること。

問九 本文中に述べられている内容として合致しているものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 明治維新以前の日本は、明確な身分制度があったが、これは現代の視点から見ても合理的なものである。
- イ 現代では、職業選択の自由が保障されているが、世襲制度が根強く残っているため、職業が限られている。
- ウ 日本は血縁を重要視していたため、欧米の近代文明を取り入れ、いち早く近代化をすることができた。
- エ ボランティア活動をしていく際、通常の仕事と同様に利益や成果を追求すると、様々な問題を引き起こす。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(解答はすべて解答用紙に記入しなさい。)

日本では、漁業を大きく3つの区分に分けています。最も小規模なのが「沿岸漁業」です。沿岸漁業は、数人乗りの小さな漁船で、日帰りの漁を行なう家族経営の漁業です。定置網や養殖業も沿岸漁業に含まれます。

次に規模が大きいのが「沖合漁業」です。大きな漁船で県をまたいで操業<sup>a</sup>します。漁場は日本のEEZ(排他的経済水域)の内側がほとんどで、1日〜数日間の漁を行ないます。ある程度のシホン<sup>b</sup>が必要なために、会社組織での漁業が多くを占めています。イワシやサバなどの群れを大きな網で巻いて獲る「巻き網」や「底引き網」などの漁法がシユリユウ<sup>c</sup>です。

そして、最も規模が大きいのが「遠洋漁業」です。遠洋漁業は日本のEEZの外側の漁場で漁を行なうものです。最も遠い場合では地球の反対側まで行くこともあります。漁期も数カ月から、場合によっては1年を超えるケースもあります。主な漁法は「マグロ延縄<sup>はえなわ</sup>」「巻き網」「底引き網」です。

1950年代に発展した遠洋漁業は拡大を続け、70年代には日本の漁船が世界中に進出していました。こうした外洋進出の目的は、食料増産ばかりでなく、別の面もありました。東京水産大学(現・東京海洋大学)の平沢豊教授は次のように述べています。

「沿岸から沖合へ、沖合から遠洋へ」のローガンは、建前としては我が国の漁業の様相を根本的に変えることを目的としていた。I、沿岸の過剰な漁船を沖合へ、遠洋へと展開させることによって、現存する沿岸・沖合の過剰な漁獲努力量、つまり過剰な漁船、人員を減少させ、漁船一隻あたり、1人あたりの漁獲量を大きくし、所得を向上させることを目的とした、間引き政策なのである。

(『日本の漁業―世界の漁業―略奪から管理へ』北斗書房より引用)

戦後まもなく、参入障壁が低い沿岸漁業は、あつという間に過剰漁獲の状態に陥っていき、1952(昭和27)年の時点で業者はすでに減少局面に入りました。1962年の『科学技術白書』にはすでに「沿岸漁業は、就業者が多く、生産性も著しく低いため、抜本的対策を講じないかぎり、現状の維持さえも困難」と記述されています。漁場を外洋へと拡大する政策は、国内の過剰な漁船を外に押し出すことで、国内漁業を保護するという目的もあったのです。

1950〜60年代には漁獲技術の革新も起こりました。なかでも最も画期的だったのは、長崎県の古野電気が発明した魚群探知機です。潜水艦に搭載されていた超音波の技術を応用して、海の中の魚の群れを感じする装置です。魚群探知機の登場は、それまで経験と勘に頼っていた漁業のあり方を二変させました。

魚群探知機が普及する以前は、「沈船を見つけたら家が建つ」といわれていました。沈船のような海底構造物は隠れ家となるので、魚が多く集まるからです。魚群探知機がない時代には、人間に知られていない魚礁<sup>きょしょう</sup>がたくさんあり、漁業にさらされない魚が多く生息していましたが、魚群探知機の普及により、誰もが上を船で通

るだけで魚群や魚礁となる構造物を見つけることができるようになりました。1950年代から普及した魚群探知機が、経験的知識の蓄積がない海外漁場の開発に威力を発揮したのはいうまでもありません。冷凍・冷蔵技術の発展も漁場の拡大に寄与しました。

日本漁船の海外での操業は、魚を獲れるだけ獲り、獲れなくなったら場所を変えて別の魚を獲るといふ、収奪型な漁法を採用していました。産官学を挙げて、新漁場開発と未利用資源の開発に力を入れることで、収奪型漁業の継続が可能だったのです。

当時、世界の遠洋漁業国は、程度は違えど同じような感覚で魚を獲っていました。なかでも日本の魚を獲る技術は世界で、とりわけ、他国よりも早く、多く獲る早獲り競争においては、今でも世界屈指の技術を有しています。

海外漁場における日本の漁獲量が右肩上がり増加するにともない、沿岸国(特に途上国)からは不満の声が上がりました。日本の水産業界には、「自分たちが開発した漁場は自分たちのもの」という感覚があつたのですが、沿岸国にしてみれば外国の大型漁船がやって来て自国の沿岸の資源を根こそぎ持って行ってしまうので、すから、不満がたまるのも無理はありません。

当時は、沿岸3海里から外の海の水産資源は早い者勝ちの獲り放題であつたため、沿岸国は指をくわえて見ているか、自分たちも一緒に獲るかしかありませんでした。そのうち、先進国に対抗する漁獲能力を持たない途上国が漁場を確保するために、自分たちが排他的に利用できる漁業水域を広げようという動きが出てきます。

1960年、スイスのジュネーブで「第二次国連海洋法会議」が開催され、領海の拡大を求める途上国と公海漁場の維持を目指す日本などの遠洋漁業国が対立しました。そこで米国とカナダが中心となり、6海里(約11キロ)の領海と、その外側に6海里の漁業水域を認める折衷案(せっちゅうあん)をまとめて、幅広い支持を得ました。沿岸国の排他的漁業水域を、これまでの3海里から12海里まで拡張しようということです。強力な海軍力を持つ米国は、航海の自由を求めて、領海の拡張には消極的でしたが、途上国の主張は無視できないという判断です。これに対して日本は、自分たちが自由に使える漁場が狭められてしまうと考えて白票を投じます。その結果、採択に必要な参加国の3分の2の賛成に1票足りず、この案は立ち消えとなりました。もし日本が賛成していれば、12海里の漁業水域が国際条約になっていたはずですが、

ところが、話はこれで終わりません。第2次国連海洋法会議でのゼロ回答(ぜろこたわ)に業(ごう)を煮(に)やした途上国の働きかけによって、1973年に「第三次国連海洋法会議」が米国・ニューヨークで開催されます。そして、議論の末に、今度は200海里(約370キロ)までの排他的経済水域という国際的な枠組みが確立されたのです。

会議が始まるころにはすでに外堀が埋められていたようで、当時の外務省の外交交渉の経過を記した『外交青書』には、このときの様子が続くように書かれています。「現在開催されている第3次海洋法会議においては、200海里の排他的経済水域設定はもはや動かし難い趨勢(すうせう)となっており、かかる国際的潮流を背景として、資源ナシヨナリズムに立つ沿岸国の主張はますます強化され、沿岸国による領海あるいは漁業水域の拡張が相次いでいる」

第3次海洋法会議の結果を受けて、76年1月から77年3月までに、先進国と途上国を含めて、総計約20カ国が200海里水域を設定しました。





問七 傍線部④「陸地から遠い海域は砂漠のようなもので、生物が住む場所は極めて限定的になるからです」とあるが、「砂漠のようなもの」で使われている表現技法として最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩
- イ 隠喩
- ウ 擬人法
- エ 体言止め
- オ 倒置法

問八 傍線部⑤「大きな食物連鎖のピラミッド」とあるが、これはどういうことをいうのか、最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 太陽の光や栄養塩によって、植物プランクトンが大量発生し、それを魚が食べに集まるといふ段階状の仕組みのこと。
- イ 太陽の光や栄養塩の集まる陸地近くの海には動物性プランクトンが大量発生し、赤潮などの環境被害をもたらすということ。
- ウ 暖流と寒流の交わる地域には、多くの植物性プランクトンが集まるため、世界中の魚や貝などの海産資源が獲れるということ。
- エ 陸地から離れた海域では人工物に汚されることなく自然のままの状態であるため、さまざまな海洋生物が共存しているということ。

問九 本文の内容に合致していないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 200海里排他的経済水域が設定される以前は、各国の沿岸3海里から外の海の水産資源は規制なく獲ることができたため、日本では沿岸漁業の飽和状態を解消すべく漁場を外洋へと広げていった。
- イ 1960年、スイスで「第二次国連海洋法会議」が開催され、領海の拡大として、6海里の領海とその外側6海里の漁業水域として沿岸国の排他的経済水域が12海里に拡張された。
- ウ 1973年に開催された「第三次国連海洋法会議」の結果を受け、資源ナシヨナリズムに立つ沿岸国の主張が認められ200海里の排他的経済水域が認められた。
- エ 200海里排他的経済水域が設定されてからも入漁料を払うことで日本船は海外漁場での操業を継続していたが、徐々に入漁料が引き上げられ、日本船は海外漁場から締め出されていった。

